

未来に夢をのせ、学ぶよろこび。

## 都留文科大学



郡内地方の産業・文化の中心地として発展してきた都留市。明治の末には、甲府に次ぐ繁栄を極め、その名は県下はもとより全国に知られていました。

都留市では、幕府の直轄地となつてからの天保13年（1843）、時の代官佐々木道太郎によって谷村陣屋内に教諭所が設けられ子弟の教育が進められて以来、教育に対する感心が高まり、教育尊重の伝統が培われてきました。

学園都市としての輝やかな未来と、学ぶことによるこびを見出す多くの市民に支えられ、学園のまち都留の建設が着々と進められています。その中心として都留文科大学があります。現在3学科に全国から2,373名の学生が集まり、勉学に励んでいます。62年には1学科増え名実ともに飛躍的な発展を遂げようとしています。



- ① キャンパス
- ② 図書館内部
- ③ 第17回子どもまつり
- ④ キャンパス全景

富士の雪溶け水を集めてとうとうと流れる桂川。

清冽で豊かな水に恵まれた都留市では、江戸時代寛永10年（1632）秋元但馬守が谷村の藩主となって以来、養蚕と織物の振興がはかられ、絹織物の生産地及び集散地として発展しました。

江戸時代には、すでに郡内織物は通称「海気」と呼ばれ全国に知れ渡ってきました。明治に入り「海気」は「甲斐絹」と文字を変えている。これは、初代の山梨県令、藤村紫朗が命名したと伝えられています。甲斐絹は新たな素材（レーヨン、アセテート）の開発により姿を消しましたが、この伝統と技術を先染めの「甲州織」として受け継がれて今日に至っています。

「甲州織」ドンス夜具地は郡内織物の中でもその王座を占め、デザイン、撚糸、染色、整経、製織にその技術を誇り品質の良さは折紙つきです。

- ① 糸染
- ② 甲州織製品
- ③ プリント工場
- ④ 織物工場



300年の歴史の中に、優美と伝統を秘めて。

甲 州 織

織物と学園の城下まち

# 都留の見どころ、春夏秋冬。

## せせらぎに春を知る

富士の雪溶け水が桂川に注ぐとき、せせらぎの音に都留の人々は春の訪れを知ります。光る風、もえる緑、すきとおる水。川茂の桜、都留の春はまばゆいばかり。



▲法能のあやめ ▲川茂の桜



▲鹿留川の新緑



## ▼桂川のアユ釣り

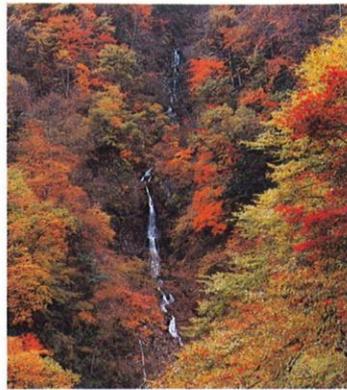


▲グリーンロッジ

## 深緑の夏、自然と親しむ

緑がいつそう濃さを増す夏、涼風が川を渡る時、糸をたれる釣り人の姿が都留ならではの風物詩。グリーンロッジからは、子どもたちの歌声が聞こえてきます。





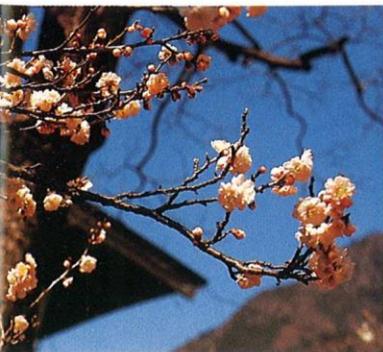
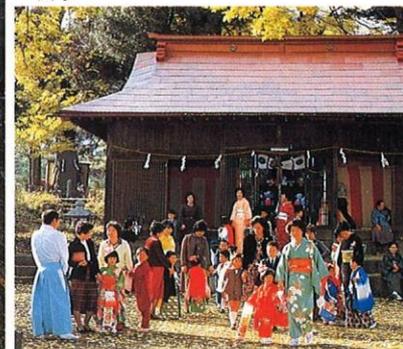
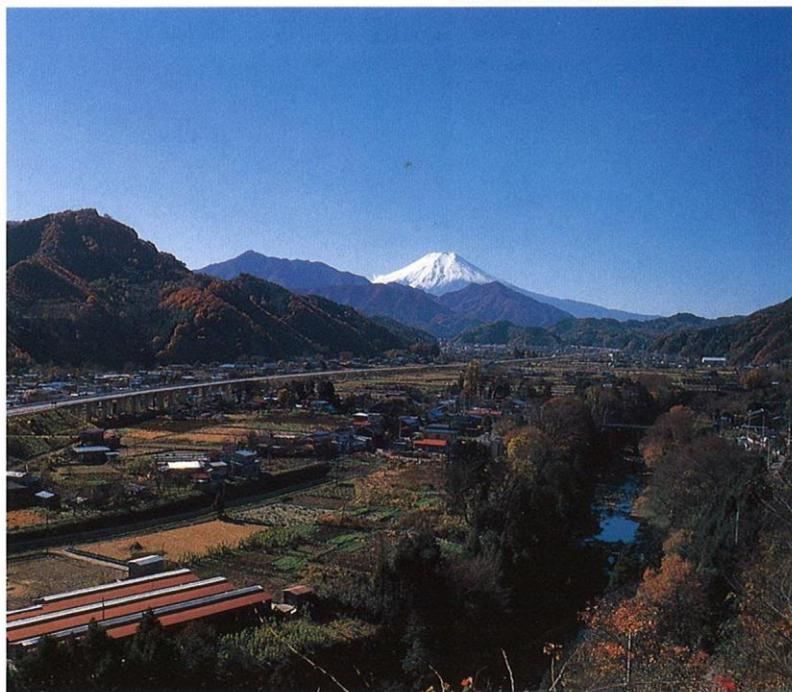
◀千段の滝

**紅葉の秋が静かに暮れて**

夕日が映える都留の秋。山々が紅葉に染まる季節。紅葉に映える三ツ峠・千段の滝。里の秋では、宮参りに向う親子連れの姿が見られます。

◀紅葉の里

▼宮参り



▲八房の梅 ▲田原の滝



**冬来たりなば……**

田原の滝も一面の雪景色。土の下では、やがてくる春を待つ草花の芽が。寒さの中にも、少しづつ春の気配が感じられ、寒梅の香りがほのかにただよいはじめます。

織物と学園の城下まち

## ロマンを秘めて、歴史の絵巻物。



### 尾咲原遺跡復元住居

縄文時代中期の住居を発掘調査し復元したものです。

住居地は、柄鏡状で床面に扁平な石が敷き詰められています。



### 尾県郷土資料館(県指定文化財)

建物は明治10年に建築された洋風建築旧尾県学校校舎で、昭和48年12月に建物復元工事が実施され民俗資料を中心とした尾県郷土資料館として生まれ変わりました。

昭和61年3月には建物にふさわしい資料館づくりをめざして内装改修がおこなわれ、明治期の教員室、教室、裁縫室が再現され、また、昔なつかしい教科書、文具、遊び道具などの学校と子供たちに関する資料が所狭しと展示されています。

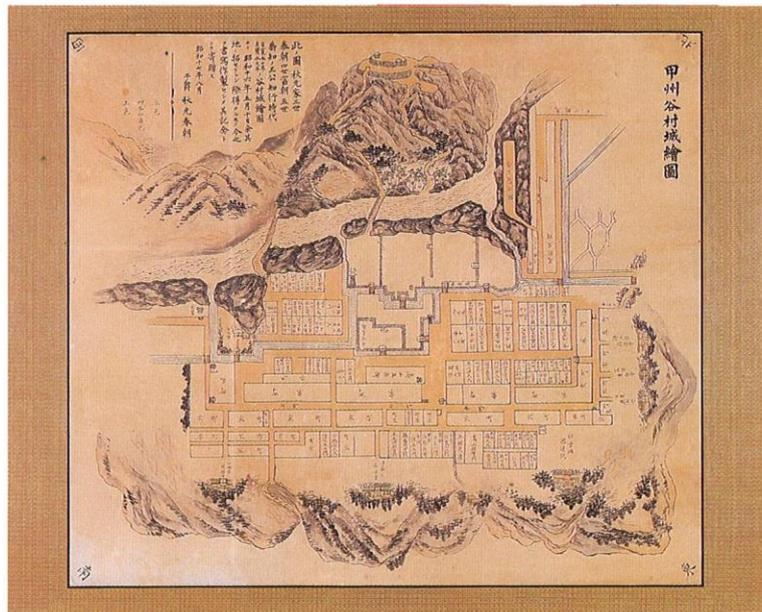
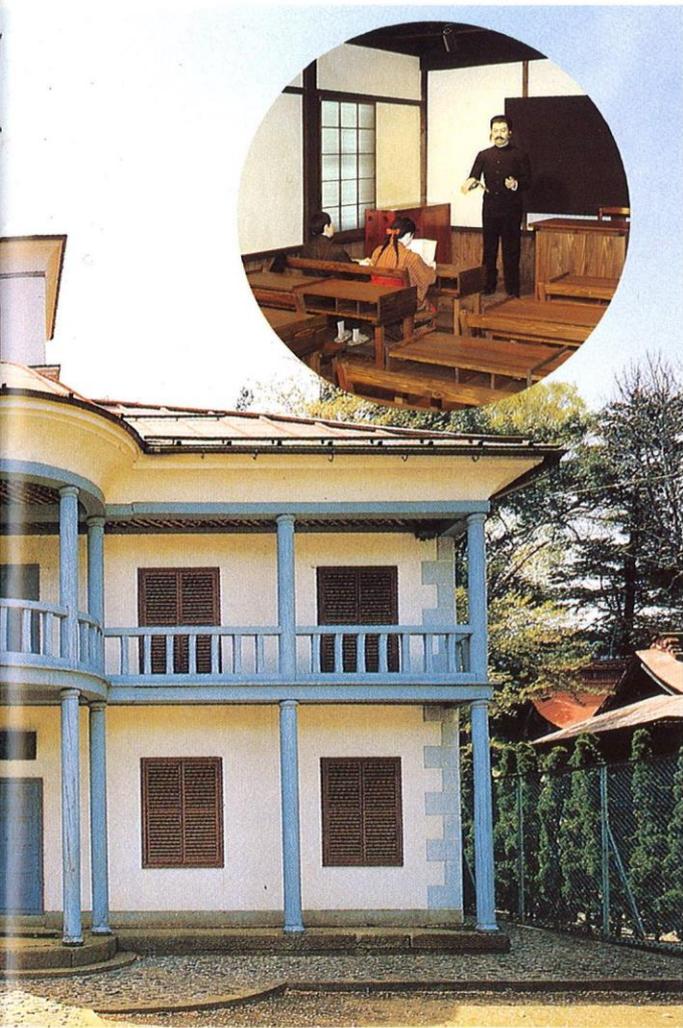
### 小山田越中守信有画像

武田信玄公の父信虎らとともに戦国時代に活躍した武将で、別名を出羽守ともいい、大儀山長生寺(羽根子)の開基。画師は不詳とされていますが、当時の画法をいまに伝える画像です。



### 太宰府天神社の調刻

江戸時代の末期、伊豆の彫刻師小沢半兵衛とその息子福田藤右衛門(俊秀)によって彫り上げられたもの。天野家の一室で長期にわたり丹念に彫られた、みごとな作品です。



**甲州谷村城繪圖**

秋元公三代居城のこの絵図は、谷村（館）と勝山城を合わせて一城としているなど、当時を知るうえで貴重な手がかりとなっています。谷村大堰の整備のようすもはつきり描かれています。

**屋台後幕「牧童牛の背に  
笛を吹く」**

この後幕は、水辺の柳の下に牛の背に乗った牧童が横笛を吹いている図柄がみごとに縫い取られています。文化年間の有名な浮世絵師、葛飾北斎によって下絵が描かれたといわれています。



織物と学園の城下まち

## 今ものこる、城下まちの心意気。



# 八朔祭

【子供の写真】

### 絢爛豪華な時代絵巻

「下に一、下に一」と、古式ゆかしくねり歩く生出（おいで）神社の秋の例祭「八朔（はっさく）祭」。毎年9月1日から行われる大祭で、江戸の名残りを今に伝えています。

「大名行列」のいわれは古く、寛永10年（1633）までさかのぼり、その絢爛豪華（けんらんごうか）さは、さながら時代絵巻を思わせます。この大名行列も、

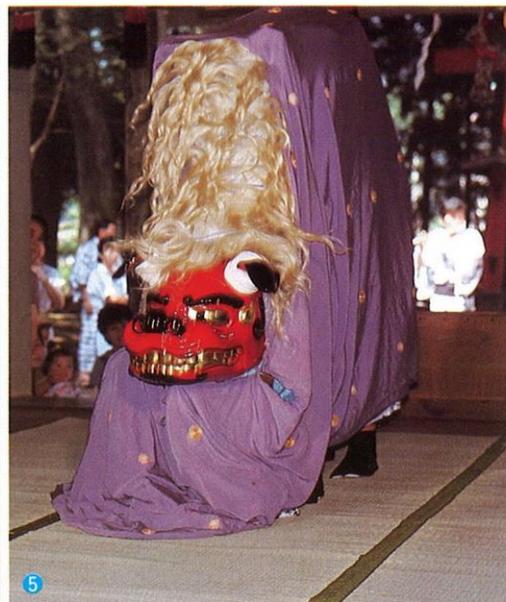
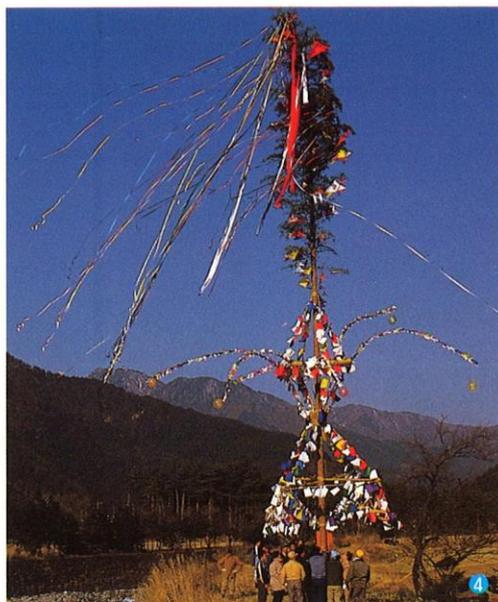
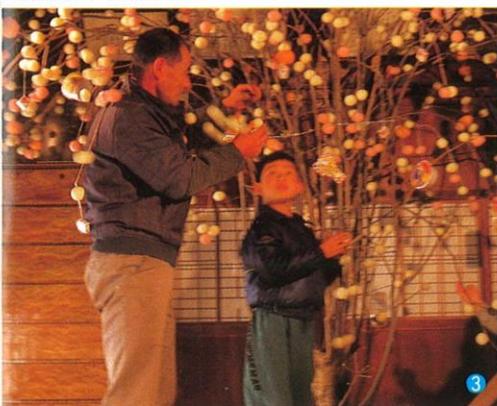
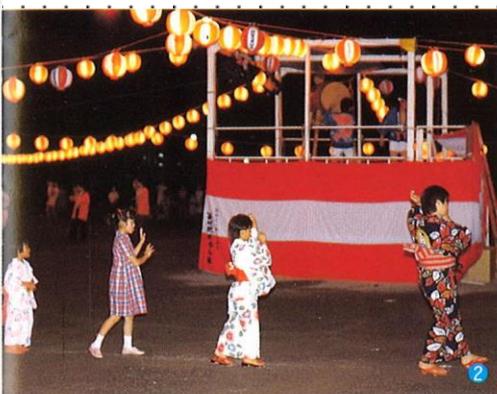
交通量の増加などにより繰り出すことのできない年が多かったのですが、昭和57年から「大名行列実行委員会」が組織され、みごとに復活しました。

祭りには県内外から大勢の見物客が訪れ、市内はどこにもぎわいを見せ、祭り気分をいやがうえにも盛りあげます。

### どんどん焼とだんごばら

冬の夜空をこがすどんどん焼きは、小正月の代表的な行事のひとつ。その年の災厄をはらい、五穀豊饒を願い、子どもたちは字が上手になるようにと、書き初めを燃やします。枝にさした団子を焼くのもまた、楽しみです。

写真



【子供の写真】

笛、太鼓、舞、生出神社神楽

古くから生出（おいで）神社に伝わる神楽には、長い伝統があります。この神社の神楽は熱田太神宮系で、全盛は江戸時代、安永8年には、「他の土地に行って神楽を教えてもよろしい」旨の免許状をおくられています。親から子へ、子から孫へと大切に守り伝えられてきた郷土芸能の一つです。

色あざやかな、道祖神祭

「塞の神」は、赤や緑の色紙に祝う心をこめて立てるもの。冬空にひとときわあざやかな色がたなびき、それが重ければ重いほど、しあわせが。

豊作祈願をこめて、都留御獄ばやし

この「はやし」は今から430年前から家運隆盛や豊作祈願をこめて人々に受け継がれてきた御獄（みたけ）神社の祭典

附属芸能として有名です。昭和57年に40年ぶりに復活されましたが、現在「都留御獄ばやし保存会」の人たちによって、大切に継承されています。

- ① 金山神社夏祭り
- ② 盆おどり
- ③ だんごばら
- ④ 塞の神
- ⑤ 生出神社神楽
- ⑥ 御獄ばやし